

超然文学賞も五回目。だいぶ「軌道にのって」きました。

この賞は超然特別入試に紐付いた空前絶後のユニークな賞です。

きっとまだ日本でここだけなんじゃないでしょうか？ ごく短い分量の小説または短歌が「かなり」うまく書ければ（その年の応募作のうちの上位5篇くらいのうち選ばれるくらい明らかにじょうずなら）、大学入学試験という胃の痛くなる難題のかなりの部分をパスできるのは、青春の輝かしい時期を、受験勉強などという嬉しくないもので費やしてしまわずにすむかもしれない。うまくいけば、ほかの好きなことにだいじな時間やエネルギーをつかえます。かなりお得じゃありませんか。

そう、これは、歴史と伝統ある有名国立大学への、抜け道、近道、いえ、ほとんど、鍵がないとつかえないVIP専用エレベータです。

モノを書くことが好きなかた、得意なかた、なにかを生み出すことに夢と情熱を抱くかた、文芸的才能と自信と経験をお持ちの全国の高校生のみなさん。

この鍵をつかみにこないなんて、もったいなさすぎです。

将来を考えるよすがのひとつとして、いえ、なんなら、ただの腕試しでもかまいません。ぜひぜひ、もっともっと大勢のかたに、ふるって挑戦していただきたい。

ガチで勝負を挑んでいただきたい。

小説や短歌のうまい高校生なら超然に挑戦するのが「とうぜん」になって欲しい。スポーツができるひとが、インターハイだとか甲子園だとかで活躍し、プロに引き抜かれていくみたいに。

いつか、ここで生まれた作品たちやここから飛び立った作家たちが、日本文学史上希な大傑作になり文壇の寵児になる日が来るのを、こころより願ってやみません。

さて。選者が応募原稿を拝見するのは締め切って事務方が整理整頓をしてくださってからから選考会までの、ごく短い期間です。およそ一ヶ月。ぜんぶ読みます。よほど読めないものでないかぎり、最初から最後までとにかく読み通します。短期間にまとめて読むかもしれないし、何日かにわけて少しずつバラバラに読むかもしれない。

このことを自覚・意識してみてください。

こんな状態で読んで好感を抱くのは、「読んだらおもしろくて、とまらない」ものです。

食レポに駆り出されたタレントさんとかアナウンサーさんとか見るとわかると思います。ほんとに美味しいものは、ひとくち食べたとたんに目がキラんと輝きます。そして、なにかレポートとしての感想を言ったあとも、食べる手がとまりません。もらったぜんぶを食べきっちゃいます。ほかにもたくさん食べなきゃいけないものが並んでいて、うっかりお腹いっぱいになっちゃうとまずい、そうわかっているけど、あまりにも美味しく、好きだ！ と脳が叫ぶと、とまらないんです。食べちゃう。

読むのも同じ。

おもしろいと読んじゃう。先が気になると、読んじゃう。キャラにほだされると、読んじゃう。真剣に身をいれて、本気で読んじゃう。そうやって、ついつい読まされて、最後まで読みきってしまうものが、最強です。負けません。

次が、食べやすい、じゃなくて、読みやすいもの。つるつるはいる。ひっかからない。イヤな感じがしない。

この逆が「口にあわないもの」。なんとなく、へんなもの。残酷ですが、たいがい一口めでわかります。文章でいえば、最初のだんらく。ひとまとまり。もしかすると一行。そう、語りはじめで、ひとにいやがられないことは、ものすごくだいじです。

そういう「美味しくない」原稿を改めるのには、とても簡単な方法があります。

ひとりで書いて、完結したとたんに、内緒でこっそり応募しないこと。

書き上げたら、まず、だれか、他人に読んでみてもらうこと。

同級生、先生、家族などなど。なるべく大勢、さまざまなひとに、読んで感想をいってもらってください。

できたら、本屋さんや図書館にいった、通りすがりの見ず知らずのひとに、あたまをさげて頼んで、読んでみてもらってください。そういうところに生息しているひとたちは、ふつうより（もしかすると家族などあなたに近しいひとよりも）書かれたものをたくさん読む経験をしていがち。だから、辛辣なことを言うかもしれないけれど、若者を応援してくれる気持ちがあるかもしれない。

いや、むり、そんなことできるわけない、ネガティブなことを言われたら心が折れちゃうもん、って？

そうですね。けなされればくやしいです。でも、それは「のびしろ」です。成長のチャンス、さらなるチャレンジのための重要なヒントなんです。

「いいね、好きだなこれ、うまいね、すてきね」とほめられるかもしれない。それは、もちろん、すごく役に立ちます。具体的に「このこのシーンが良かった、このキャラがカッコ良かった、このセリフがエモかった」などと言ってもらえたら、いいですねえ、嬉しいですね。大いに自信をつけてください。そして、そのいいと言ってもらえた部分、あなたの強みを、最大限に生かすように、さらに努力をかさねてみてください。

大学のスタッフや最終選考委員を、あなたの応募原稿の「第一読者」にしてはいけません。たくさんのさまざまなひとに読んでもらうことを前提に、ひとにわかってもらえるおもしろがってもらえるものを、書こうとして、書いてください。

この意識をかえるだけで、きっとものすごく変わります。

最終選考に残って私自身が読んだ作品については、作者さまそれぞれに個別に具体的な感想をお送りします。青春のたいせつな時間とエネルギーをつかってせっかく応募して下さったことへの、せめてものお礼の気持ちです。耳に痛いことも言ってるかもしれませんが、今後の参考にしていただければ幸いです。

上位3作品の講評は、以下のとおり、公開します。

鈴音を見上げて

妻を亡くした私が旅に出ている。列車に乗り、通りすがりにりんご飴をもらい、「旅行ノート」を広げ、妻のしたかったことをたどっていく。砂浜にゆき、神社などを散策、喫茶店でオムライスを食べる。鳥居をくぐり、くじをひく。

How old are you?

ほんとに高校生ですか。とっても昭和な感性なんです。

妻が三年前になんで死んだのかぜんぜん書いてなくて、ほぼ「紀行文」なのに、すごく面白くて引きこまれる。ちゃんと、いまはいないそのひとの気配や、そのひとを思う気持ちが、ひしひしと感じられてたまらない。

【引用】私は、生きねばならない。【引用おわり】

の位置がとても明確だった。鳥居をくぐってからの一行ずつ改行するところの、山をのぼっていく感覚を読者につたえる手立てもおみごと。アゲハ蝶、『末吉』。かんぺきです。

センチメートル

身長の小さな受験生女子が生まれてはじめて小学生向けでなくSサイズのシャツを買って、先々を想い、今は勉強しなきゃと体感する話

リアルでビビッド、日常というか生活というか、「その子らしさ、生きている感じ」がよく出ていて、たいへん楽しく、面白かった。

文章もうまいし、観察力、描写力がある。

ひとが死んだり妊娠したり地球が危機になったりなどの大事件がなくても、ちゃんと、物語が書けることの手本のよう。

「はじめて子ども向けじゃないシャツを買って着る」という、ピュアでメモリアルでエポックなシーンに照準をさだめた着眼点が実に素晴らしい。

キャラもシーンもよくできていて、表現がうまいので、文句なし。

会話の流れも自然。地の文の語彙選択もリズムも一流。

【引用】多分、認めちゃいけないんだ。というか、認めたくない。億劫だ、面倒くさい、その延長線上には、私が思っているとおりの結末が待っていると理解してはいるから。私の好きなものがただの娯楽に成り下がっちゃうのは、かなり嫌だ。あることないこと深掘りして、考える。それをやめている自分というのは、もっと嫌だった。果たしてその私は、本当に私なのか…。【引用おわり】

とてもうまい。そして、賢い。聡い。よくものを考え、感じている。なにかをクリエイトするひとの天性を感じる。

「てんてん」（専門用語では三点リーダーといいます）は、いつでも「……」のようにふたつ重ねて使うのが標準。「…」があるので、次からは気をつけて。

ラスト近くの【引用】余白。言い換えれば、風通しが良すぎる部分。この心もとなさが余裕に変わる日が来て欲しい。【引用終わり】も、まとめとしてとても良いです。

タイトルも素晴らしい。さりげなくて、そして、印象的だった。

にわとり

母とふたりで暮らす公営住宅で、八ヶ月、鶏を飼ったことについて書いている。

鶏の名前がちひろ。ちーちゃん。

コロナで都市封鎖中というかすかに非現実な設定があるのに、描かれていることがらのほとんどはとても卑近で日常的で、等身大。近所のおじいさんにいろいろ教えてもらったり、暑くてベランダで飼うのが難しいとか、スイカをたくさん食べるとか、すべてがわかりやすく、「いかにも」そうでありそうで、作為が少ない。方言の会話もとても良い。これがあることで、キャラひとりひとりの肉体がくっきりし、エピソードがひとつひとつ、ビビッドになった。

すべてがおだやかでさりげないのだが、どこかに不穏さの気配があり、それでいて、ぜんたいはゆったりとユーモラス。ある日、おじいさんにつれられていなくなってしまって、かえってこない鶏は、なにかのメタファーのような気もするし、ただの事実なのかもしれない。作者がなにかを押しつけていない、ただ、自分を通して生まれてくるものを提示して、読者がそれぞれそこから感じとることにむけて開いている感じがする。今村夏子さんの小説、この史代さんのマンガのように。作者は生まれながらの作家だと思う。